Ray of hope

『希望』は自らつくり出し育むもの

東京大学 社会科学研究所 教授 玄田 有史氏

なぜ人や社会は、希望を失ってもなお希望を求め続けるのでしょうか。個人の内面の問題とみなされてきた希望を、社会にかかわる問題として捉え、東日本大震災以前から何度も岩手県釜石市を訪れ、希望学の研究を続ける東京大学社会科学研究所の玄田有史教授にお話を伺いました。

栄光と挫折を経てきた釜石だからこそ希望を失わない

――希望学とはどんな学問なのでしょうか。

玄田 希望学の正式名称は「希望の社会科学」です。法律学、政治学、経済学、社会学の4分野からなる東京大学社会科学研究所（東大社研）で、2005年に誕生しました。研究のための研究ではなく、社会で求められていることを見出し、そこに向き合い、研究の成果を国民生活に還元していくことがテーマです。

2000年を過ぎたころ、日本は不況に陥り、リストラ問題などが浮上するなかで、将来に「希望が持てない」とよく言われました。村上龍さんの小説『希望の国のエクソダス』のなかで、中学生が言った「この国には何でもあるが、希望だけがない」というセリフは当時の流行語にもなり、それが当たり前のようになっていました。それなら逆に「希望を持つ」とはどういうことなのか、希望と社会の関係を考察してみようと研究を始めました。

――なぜ釜石が希望学の研究対象となったのでしょうか。

玄田　希望という言葉は、困難な状況のなかで前に突き進もうとするときに出てくるものです。したがって希望は挫折した人が持つものです。しかし、だからと言って挫折を経験すれば、必ず希望を持てるというわけではありません。そんな簡単なものではないので、挫折を希望に変えていくことについて、いろいろ調べてみましたが、納得できる答えは見つかりませんでした。

そうしたなか、ある宴席で「希望の研究をするなら、挫折を経験した人がたくさん住んでいそうな場所に行って、話を聞くのが一番だよね」と仲間同士で語り合っていたところ、新日鉄(現在の日本製鉄)社員の友人が「それなら釜石に行ってみたら?」と何気なくアドバイスしてくれたのです。

釜石は江戸時代から鉄の産地として知られ、明治時代に近代的な製鉄所が完成して以降、日本の発展を支えてきました。その間、まちは度重なる苦難を経験しました。1896(明治29)年と1933(昭和8)年の三陸地震による二度の大津波で甚大な被害を受け、太平洋戦争末期には連合軍の二度にわたる艦砲射撃と空爆で一面の焦土と化し、製鉄所の機能も破壊されました。こうした困難を乗り越え、釜石は東北有数の工業都市として、1960年代の最盛期には人口が9万人を超え、活況を呈していました。しかし1989(平成元)年の高炉休止などの影響によって、現在の人口は最盛期の半分以下に減りました。そんな栄光と挫折を経てきた釜石だからこそ、希望を失わず行動を続けてきた人がいる。その現実をこの目で見て確かめてみたい。釜石に向かったのは2006年1月のことでした。

――釜石での反応はいかがでしたか。

玄田　二つの反応に分かれました。一つは「かつて〝地方の希望の星〟とまで言われていたのに、ひとたび廃れるとこんなにも悲惨なのかというのを調べに来たのだろう」というネガティブなものでした。もう一つは「鉄だけに依存してはいけない。そういう危機意識を持って変わろうとしている姿を見に来てくれたのだ」というポジティブなものでした。フィールドワークで対話を重ねていくうち、お互いの理解が深まり、今や一生のお付き合いとなりました。

時に流されないように自己管理していた避難所の人々

――東日本大震災が発生したとき、玄田先生はどこにいらっしゃいましたか。

玄田　2011年3月11日は東大社研にいました。希望学における全所的プロジェクトとしての活動は一区切りついていたため、少し落ち着いた時期でした。震災の状況を知ったとき、決してこちらから希望を与えようなどとは思わず、自分たちにできることは何かを必死で考えました。

――現地入りされた当時はいかがでしたか。

玄田　震災直後は新幹線が不通でしたから訪問できませんでした。4月に入り、たまたま羽田空港から花巻空港に向かう臨時便のチケットが取れたので飛び乗りました。

現地で皆さんとたくさん握手したとき、私の手を握り返す力強さに安堵しました。避難所の人たちのために何か役立つものはないかと考え、迷った末に卓上カレンダーを大量に持参したところ、とても喜ばれました。震災で大切な人を亡くされ、辛く苦しい思いをされていた人たちは、自分自身が時に流されないようにしようと思ったのでしょう。今日やるべきことや、やりたくてもできなかったことをカレンダーに書き込み、一つ一つ確かめていくことが希望につながったようです。

何度も現地に足を運んでいるなか、釜石市役所の知人から「今度いつ東大さん(私はそう呼ばれていました)は来るんだい?と親父が楽しみにしている」と言われたことがあります。人生の良い部分だけでなく、辛かったことも含めて相手の声を傾聴することがどれだけ大切なことかと気づきました。挫折を経験した人が、何を希望にして生きてきたのかを、きちんと聞くことに大きな意味や価値があることを学びました。

――釜石の現状をどのように感じていますか。

玄田　定住人口は減っていますが、その地域に対して希望を持ち、それを実現するために何らかの活動をしている「希望活動人口」は減少していないような気がします。また釜石には、小ネタが豊富にあることも大きな意味を持っています。

東京大学社会科学研究所は2016年11月14日、東日本大震災による津波の記憶継承と将来における危機対応を研究するための協働拠点として、釜石市とともに危機対応研究センターを開設した。翌15日には危機にまつわる意識や行動に関するアンケート調査の内容について釜石市役所関係者へのヒアリングと意見交換を行い、被災地の現状ならびに課題に関する現地視察調査も実施した。

危機対応学シンポジウム「釜石と希望学のこれから－『危機対応学』始めます！」

被災地の視察調査

釜石市役所でのヒアリング

とかく復興の話になると、人々は大ネタを考えがちです。しかし大ネタは、お金と時間がかかるうえ終わりがあります。釜石は今、ラグビーワールドカップ2019という最大の大ネタにチャレンジしていますが、重要なのはそれに付随する小ネタをどれだけ関係者が持っているかということです。例えば「ラグビーをきっかけに、自分もこんなことをするようになった」「初めはすごく反対していたけれど、このような理由で今は賛成している」といった話は小ネタになります。釜石に笑顔があふれているのは、小ネタがたくさんあるからです。

緩やかな絆でつながる ウィーク・タイズ

――復興に欠かせないキーワードの1つに絆があります。絆の大切さについて教えてください。

玄田　通常、絆というと一致団結的な強いつながりをイメージしますが、それは「ストロング・タイズ(Strong Ties)」です。同じ価値観を持つメンバーとずっと一緒にいることで、あうんの呼吸でわかり合える仲間がいると独特な幸福感につながります。

絆にはもう一つ「ウィーク・タイズ(Weak Ties)」があります。緩やかな絆という意味です。ウィーク・タイズはバックグラウンドが異なる仲間の集まりであるため、それぞれの動きや経験も違えば、ときには住んでいる場所や仕事も異なります。しかし何かあったときには、信頼関係をベースに率直な話ができたり、馬鹿話もできる。そのなかで「漠然と自分の思っていたことが、それほど間違っていなかった」と思えるような関係が、希望に対して有効に働きます。

希望は人と人とのつながりから生まれます。つながりにはストロング・タイズが重要ですが、ウィーク・タイズも大切です。地域を越えた緩やかな絆は、新たなアイデアや情報の取得を可能にし、創造的な復興につながることでしょう。

――東大社研の希望学プロジェクトで上梓された『〈持ち場〉の希望学』や『危機対応学』についてお聞かせください。

玄田　震災後、市役所の方々にインタビューした際、「これが自分の持ち場だと思ってできることを一生懸命やった」という話を聞いて、持ち場という言葉に感銘しました。2014年に発行した『〈持ち場〉の希望学：釜石と震災、もう一つの記憶』では、震災のなか、公の仕事を全うした人はそれぞれの立場で何を考え、いかに行動したかのかをオーラル・ヒストリー(口述史)を通じた言葉でつづっています。

また東大社研と釜石市は16年11月、東日本大震災による津波の記憶継承と将来における危機対応を研究するための協働拠点として、危機対応研究センターを開設しました。そこでのアンケート調査結果に基づいて18年に発行したのが『危機対応学：明日の災害に備えるために』です。このなかでは、エンジニアリングとブリコラージュ(bricolage)について

東京大学社会科学研究所の危機対応学・釜石調査チームは、2017〜18年度3回にわたり釜石地域の現地調査を行った。これまで実施した希望学・釜石調査(第一次06〜09年度、第二次11〜13年度)と比べ、地域社会連携や文理融合といった新しい協働関係の構築を試みた点が大きな特徴だ。

港湾防波堤

釜石製鉄所

(株)エヌエスオカムラ

復興道路(釜石中央IC)工事現場

記しています。

エンジニアリングとは、目標をつくり計画を立て、そのために準備をしてプロセスを考え管理していくことです。それに対して、ブリコラージュは、今ここにあるもので何とかやりくりをしていくという意味です。繕うというフランス語のbricolerに由来し、フランスの文化人類学者クロード・レヴィ=ストロースが1962年の著書『野生の思考』のなかで用いた言葉です。

ブリコラージュという概念は、エンジニアリング的なものを否定するのではなく、その価値を十分に認めながらも、それだけでは対応しきれない部分を補うべきものです。アンケートの調査結果を分析した結果、危機対応にはエンジニアリングとブリコラージュの融合が重要であるという考えが新たに導き出されました。

希望に棚からぼた餅はない

——改めて希望とは一体どのようなものなのでしょうか。

玄田 希望は言葉にして書いたり、声に出すことが大切なことです。同時に希望は与えたり与えられたりするものではなく、自分たちでつくり出し、育んでいくものだということを釜石で学びました。

震災前に、リーマンショックの影響で赤字を経験した鉄製家具製造会社の(株)エヌエスオカムラにインタビューした東大社研のメンバーは、副社長から「希望に棚からぼた餅はない」と言われたそうです。「希望というものがあるとすれば、自ら動き、もがいて、ぶち当たるものが希望なのではないか」と言われたと聞き、衝撃を受けました。以来、誰かに希望を与えるなどというのはおこがましいことであり、どんな苦しい状況にあっても人間には自ら希望をつくり出す力があるのだから、それをみんなで支え合っていくのが大事だと考えるようになりました。

釜石に通っていて良いなと思うのは、学問と実践が直結していることです。ときには釜石弁がよく理解できず、相手にもそれが伝わりお互いに笑ってしまうような場面もありますが、そうした環境に癒されているのも事実です。希望はつかみどころのないものですが、これからも私は釜石の人たちと共にその神髄を究めていきたいと思っています。